

「生物機能開発研究所紀要」創刊のことば

中部大学は、本年4月に発足する応用生物学部に先立ち、昨年4月に第8番目の研究所としてバイオテクノロジー分野の研究拠点、生物機能開発研究所を設置した。この名称からおわかり頂けるように、生物がもっているさまざまな機能を開発・利用して、人類が直面している環境、食糧や健康にかかわる諸課題の解決に当たろうという、大きな目標を掲げたわけである。さらに、この研究所を産業界や国・自治体と共同して問題解決を進める橋頭堡にするとともに、当時、文部省に申請中であった応用生物学部が発足したら、その目指す教育研究を研究面からサポートさせよう、そして両者の緊密な連携によってバイオ関連技術の研究開発の高度化、先端化を進め、社会への貢献を加速させよう、と意図したのである。

新聞が、バイオ関連の記事を掲載しない日はない。このことは、それくらい国民がバイオに期待と関心を持っていることのあらわれであろう。とくにバイオ関連記事は、環境、食糧や健康問題を、生物やその機能の一部を利用して解決できる見通しがたった、というものが多い。最近の紙面をにぎわしている、ヒトゲノムやイネゲノムの解読競争、遺伝子導入トウモロコシのスターキング問題あるいは干潟生物群の環境浄化機能の大きさを示唆する有明海ノリ騒動など、その例である。夢もあるが、まだよく解らないところもあるというのが現状なのであろう。まさに、バイオテクノロジーは、21世紀の科学技術なのだというのが実感である。

生物機能開発研究所は4人のスタッフで研究活動を開始し、この度、その1年間の活動の成果を「研究所紀要」という形で社会に発信することとなった。それぞれのスタッフの専門分野である食品科学、生物模倣材料、発生遺伝学、植物生態学のバラエティに富んだ研究報告に加えて、研究所が今後目指さねばならないであろう課題の一つとしての、植物における組換えDNAや光合成の問題なども包含しようとの欲張った考えから、その分野のすぐれた外部研究者にも寄稿をお願いした。

幸い、新学部も当初の計画通り本年4月に発足する運びとなり、研究所とタイアップして技術開発研究の先端化・高度化を図る条件ができた。本紀要の創刊を嚆矢として生物機能開発研究所の設立の主旨を具現化し、本学の建学の精神、「あてになる」研究機関として成長させたいと願っている。

2001年3月

生物機能開発研究所長

岩田幸二